

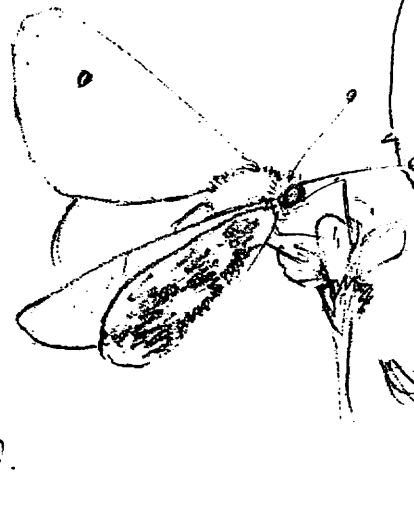
5/18(日) ~ 5/25(日)

新人合宿

報告書

SAC

信州大学山岳会



もくじ
P12, 記録
P3 ~ 反省・感想
魂の叫び
P18 ~ 係り手の反省
感想

於・槍・穂高

記録

<p>2002/1/10 箱</p> <p>7:00-4-1日</p> <p>5:30 起床</p> <p>6:00 起床</p> <p>6:10 08 起床 洗濯機</p> <p>6:10 30 休養 二休</p> <p>6:25 00 起床</p> <p>7:47 10 起床</p> <p>8:05 起床</p> <p>9:15 00 起床 洗濯機</p> <p>9:25 起床</p> <p>10:08 00 休養 洗濯機</p> <p>10:10 起床</p> <p>10:25 00 起床 休養</p> <p>10:30 起床</p> <p>10:45 00 起床 休養 洗濯機</p> <p>15:10 起床</p> <p>16:40 00 下宿</p>	<p>今日の予定 予定通り進んでいく。L1の 作業は予定通り進んでいく。</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p>
--	--

<p>5/19 2990-4-2日</p> <p>5:30 起床</p> <p>7:10 起床</p> <p>8:10 起床 洗濯機</p> <p>9:00 起床</p> <p>10:38 起床</p> <p>11:00 起床</p> <p>11:20 起床</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p>	<p>5/20 2990-4-3日</p> <p>5:30 起床</p> <p>7:10 起床</p> <p>8:10 起床 洗濯機</p> <p>9:00 起床</p> <p>10:38 起床</p> <p>11:00 起床</p> <p>11:20 起床</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p>
---	---

<p>5/21 2990-4-4日</p> <p>5:30 起床</p> <p>7:10 起床</p> <p>8:10 起床 洗濯機</p> <p>9:00 起床</p> <p>10:38 起床</p> <p>11:00 起床</p> <p>11:20 起床</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p>	<p>5/22 2990-4-5日</p> <p>4:00 起床</p> <p>5:10 起床</p> <p>5:45 起床 洗濯機</p> <p>7:20 起床</p> <p>10:00 起床</p> <p>10:30 起床</p> <p>10:55 起床</p> <p>11:15 起床</p> <p>12:00 起床</p> <p>13:45 起床</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p> <p>・根本株の分根株とかがよく見えてきた。 分根株の分根株が助かる。</p>
---	---

反省・感想

♀

1年生の

魂の叫び

新人合宿の反省 小尾智明

自分はかなり隊に迷惑をかけた。
体カと行動カに関してだ。

体カは足がまったく弱く、かなりダメ
だった。行動カは危険な場所で
時間をくっせしたり、また落石の
注意がいつも十分行えなかった。
これも反省しないことだ。

しかし、こんなことをばかり言っているも
始まらない。このことをしっかり
心にとめておき、地道にひまな
時間をつかい、体カトレーニング
にはげんでゆきたい。

また、北アルプスは、自分は初めてで、
とでもゆくゆくした。潤沢岳や虫煤ヶ
岳、そして槍ヶ岳に登った達成
感やすばらしい景色は忘れられ
ないものとなった。

また雪上訓練では、なかなか技術が
身に付かなくて、たかたかとはかできる
ようになつた。落石注意やキックステップ
などの基本的なことを怠らぬよう
よう体力をもっとつけ、余裕をもてる
ようにしていきたい。

自分に自信のもてるよう、山を
もっと楽しめるよう、夏合宿に向
けてがんばっていきたい。

小尾の魂叫び

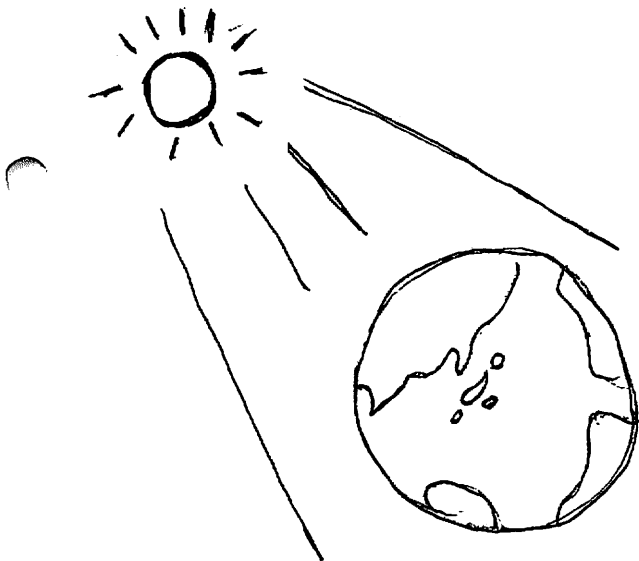
ちくしつ - 自分に腹がたつ。

なにがたんだでも 他人にたつ

たつから人間になる。

○そして、小尾 - 一生好んでいた。

以上



宇宙から見れば 自分は小さいものである。

我が魂 ここにあり

～ 2003年5月 新人合宿 ～

1年 加藤なゆ樹 (理学部物質循環学科)

序

足ではない。確かに肩だ。いや、むしろ我が肢体が「まだまだいける」具合であることなど重々承知のうえでこの一步を踏み出しているはずなのである。しかし、どうにも“力”が続かない。“今の己の心身”の状態を率直に分析してみると、30数キロの荷重にどうにか負けまいと必死になっている肩の筋肉の、いまかつて味わうことのなかった階層の苦痛に対し、精神力がどうにも続かないのである。

我々の隊列の足音が、周囲の鳥の囀りよりも明らかに鮮明に聞こえる。その理由が隊列の歩調の遅さにあるのかどうかは全く知る術もないが、隊列が遅いのは自分が遅いからであることは少なくとも事実なのである。“俺が隊の歩調を乱している”、そのことだけが妙に気になる。“俺ははたして隊に迷惑をかけているのではないか?!” そういった心持が頂点に達したとき、高谷先輩に一つ提案した。“後ろにまわったほうがいいですか(注、加藤：前から二人目)?”。そんなことをしたところで何の改善にもならないことなど冷静に考えればわかることだが、そんな余裕はとうの昔になくなってしまっているのだ。しかし、直後の高谷さんの応答 - “お前が上に着かない分には変わりないだろ” - が一つの明確な答えを出した。それは、今まで方向性を失いかげ、複雑にはつれた我が心を再び一つにまとめあげた。“ただひたすら前進するだけだ。前進すれば徳本に着く!”

巻

「体力」というものに対する考えがどれだけ甘かったかをまず最初に悟ったのが初日の歩荷の最中である。“肩痛”という、今までに体験しえなかったものに対しとにかく戸惑い、苦しんだ。そして第二陣がいわゆる“走り”だ。しかし、今になって分析してみると、その「苦」というのは“足があがらなくなった”わけでもなく、“肩痛”自体なわけでもない。本質的なところにあるものはなんなのだろうか。次への前進のために、ここで明確な自分なりの見解を出すことにした。

まず「体力が無い」ということについて考えてみたい。僕の登歩が遅いのやすぐに疲れるのは、ひとえに“体力が無い”からであった。登歩の速度に関して言えば、

その先に明確な壁があった。要するに、体力的に壁を感じたときに漠然と「体力が無い」と言うのであり、それはあくまで形容にすぎず「苦」の本質ではない。では何が「苦」をうみだしたのか。それは、ほかならぬ“精神力の弱さ”だと思う。

確かに合宿の中で数知れない壁があった。それは歩荷や走りだけではない。はたして自分はそれらの壁に“真っ正面”から突っ込んでいったらうか。おそらくはそういった壁に恐れを抱いたままもがいていたのだろう。精神力が弱いために壁を突っ切ることができず、壁に押し倒された状態が続くために「苦」がいつまでも抜けきらないのだと思う。

精神力を鍛えるにはとにかく多くの壁と向き合う、つまり“慣れろ”ということだと思う。体力をつけることはあくまで前提であり、それを主と考えてはならないのだ。少しでも多くの苦の経験を積む、つまり精神力の増強がこれから先の指針である。

式

この合宿で、場所柄で言うと5つ、地形的に言うと大きく3種の“所”を訪れた。それぞれの感想を羅列するのもなんだから、色々と比較するかたちで考察したい。まず、「島々谷」と「上高地」は“河川上流域の谷部”ということでは共通しており、標高もそれほど違わない。しかし、細かく見ると明らかに異なる点があった。前者はほぼ完璧なV字谷であるのに対し、後者では広く河原が形成されていた。山地帯の溪流部はV字谷になるのが普通であるが、上高地一帯は氷河地形の様相を強くなしていることが見てとれた。すなわち、最上流部「涸沢」のカーブから流出した氷河の浸食作用によってできたU字谷が上高地の谷なのだ、と考えるのが適当だろう。また、山頂部にも特異的な違いがあった。同じく氷河時代の影響を強く受けたと思われる「涸沢岳」山頂部及び「槍ヶ岳」山頂部。岩石が主体だった。それに対し「蝶ヶ岳」山頂部は土壌で覆われ、かつての氷河地帯の主脈からもそれ、比較的安定した土地であることがうかがえる。雪渓に関しては「涸沢」も「槍沢」も地理的に見てほしい同じ様相をなしていたが、やはりひとつ特徴として“災害性が特に強い”ことが挙げられると思う。双方で落石を幾分近くで目撃したほどだ。

ここに書いたことは目で見たもののほんの一部だろう。自然産物への探究心をなおいっそうかりたてた。

参

“己という人間の小ささ”、このことに尽きる。

されど、自然の万物を目にするためには、まず登らねばならない。確実に目にするには、一通りの登山技術と知識を養わねばならないはずだ。

「人間関係の育成」、これがこの会の目的となっている。しかしそうは言っても、はなっから正面切ってこのことを目的とするほどの意識のゆとりがない。すくなくとも1年のうちは確実な登山技術と知識の養成のためにこの会をがんばっていきたい。人間関係の育成はその“土台”がしあがってからだ。

我が魂、ここにある。

2003年5月

未踏峰

高橋昭彦

出発前は実に不安だらけだった新人合宿。初の30kgオーバーの山行。初の一週間に及ぶ長期の山行。そして、毎年四捨五入すれば10人はいる一年が一人しか残らないという現実。しかし、いざ蓋を開けてみると新人合宿は本当に楽しく充実した山行であった。そして、私に改めて山が素晴らしいという事を実感させてくれた合宿であった。

まず、私が山に惹かれる理由として第一に挙げられるのが眺望である。これは、自分の足で一歩一歩苦難の末に得られる対価であると思う。即ち山で得られる眺望とは、自分にとって荷物が重いほど、高度が高いほど、行く道程が困難なほど素晴らしく映るのである。今回は運良く好天に恵まれ、心に残る景色を幾つも目にすることができた。歩荷の末に徳本峠から望む穂高連峰。朝焼けに染まる屏風岩。バシリの末に眼前に広がる大量の雪を湛えた涸沢。涸沢岳から望む滝谷の岩壁とその先に佇む孤高の岩峰槍ヶ岳。蝶ヶ岳から望む雄然とした槍穂連峰。殺生ヶ原から見上げた蒼穹を突き雄然と立ちのぼる槍ヶ岳。そして、大槍から見下ろす、未だに多量の雪を残した裏銀の山並みや、東西南北に延びる峻険な鎌尾根。東方に横たわる常念山脈。遙か北方の立山剣等、枚挙に暇がない。また、頂からでなくとも、静寂に包まれた森や轟音を立てる溪谷等、沢山の素晴らしい景色に出会うことができた。しかし、今回目にしたのはあくまで一握りの景色であり、更に凄い山や景色があるだろう。更に世界には日本の遥か上に行くような山が文字通り山ほどあるだろう。こうした自分が未だ踏まざる峰を目指していきたい。

第二に食事だが今回の夕食は本当に美味かった。食いしごきはある意味合宿で一番辛かったが、河原で焚き火をして作った飯は実に美味い。疲れた体にこの飯は最高であった。特に最終日は下界でもなかなかありつけないほどの質と量で、こんな良い思いをさせて下さった先輩方には本当に感謝である。また、バシリや登頂の後に先輩のザックの中から出てくる果物やジュースもアメとムチの関係を感じずにはいられなかったが、北アルプスの雄大な景色が味を引き立て下界よりも更に美味しく感じた。

また、今回は初めて雪稜登降が体験できた。今までは規定や顧問云々でできなかった分野だが、山岳会では岩や雪、沢や長期の縦走等、未知の分野が待ち受けている。自分の可能性や能力の向上。そして、自分に最適の登山スタイルを確立するためにも今後山岳会で積極的に活動していきたい。晴れたときの雪稜は落石と滑落を度外視すれば本当に気持ち良かった。未知の分野にはそれ相応の危険が存在するだろうが、色々なものに挑戦し自分の登山スタイルを確立していきたい。

最後に、山岳会の会員は本当に皆山が好きで山を楽しんでいることがわかった（どちらかと言えば山岳会を楽しんでいるといった感じ）。山では皆生き生きとしていたし、特に山頂や他の山が見える所で山の話をする先輩方は楽しそうだったし頼もしく感じられた。いつかはその話に加われるように力と知識を付けていきたい。

歩荷のみならず予想だにできなかったバシリや食いしごき等体力的にも精神的にも辛

いことが多々あった。しかし、それに見合うものが山にあるということを教えてくれ、改めて山が好きになった合宿であった。

今回の合宿の反省として、あまりに初歩的なミスが多かったということが挙げられる。その一つが紛失物である。特に今回は絶対失くしてはいけない地形図とボールペンを失くしてしまった。前者はルートファイティングや山座同定等に使用するものであり、ルートによっては即遭難に繋がりがかねない代物である。今後は管理に万全を期したい。また、幕営地に於いて生活力の無さが浮き彫りになった。設営、撤収、支度のスピードはその後の行動を大きく左右するために、日常生活からきびきびと動くように心掛けたい。そして、危険に対する意識を更に向上させたい。今回は危険箇所を知らせる為にもコールをしつこくかけたとのことだが、以前この地を訪れた時は考えもしなかった所でコールがかかった。事故の原因の中には、事故者の危険に対する意識の欠如が少なからずあるはずだけにこれは一回ごとの山行で意識を高めていきたい。また、今回は先輩方に依存する場面が多々あったが、今後は自主自律的な登山を目指していきたい。

まだまだ自分には上級生と比べ、遥かに体力、技術、知識等が足りない（当然のことだが）。そして、一年の他の三人からも学ぶべきところは多々ある。なゆ樹の知識や技術の吸収力と成長力。小尾の根性や誠実でひたむきな姿勢。はたけの陰の努力など枚挙に暇が無い。先輩方にいたっては雲の上の存在といえるほどの経験と技術を持っている。今後は、自分以外の全員を師として0から山を始めるつもりで努力していきたい。

この一年は自分にとって本当に試練の年となるだろう。まだ大学生活に慣れていないし自由に山行計画は出せない。そして、まだまだ厳しい合宿が待ち受けている。しかし、今は雌伏の時であり、自分は蛟竜であるとする。いつか自分の登山スタイルを確立するため。そして、私にとって永遠の問いである「何故山に登るのか」に対する答えを探求するため地道な努力を重ねていきたい。

先程から努力努力とくどいほど言っているが、私が高校時代に自分の中に打ち立てた登山哲学に、登山とは努力の積み重ね、というものがある。また、故郷の登山家故山田昇氏の言葉で、「情熱さえあれば、努力さえすれば、山登りほど自分の夢を叶えてくれるスポーツは他に無い」というものがある。まだまだ私には未経験の分野が沢山あるが、少なくとも自分が経験してきた分野だったら全てのものに当てはまることだと思う。先輩方は私が入会した時は、何と不遜の輩が入ってきたのだと思ったことだろう。私とて過去の栄光にしがみ付きひけらかすつもりは毛頭にも無いが、高校で自分が活動した分野における努力だったら誰にも負けない自信と誇りを持っている。私自身小学校のマラソンは後ろから表彰台レベルだったし、中学の部活ではレギュラーにすらなれないほどの凡人だった。また、私の仲間達も元々やっていた競技では皆二流三流であった。そうした彼らも山に於いては地道な努力を重ねていた。これが私は山とは努力の積み重ねだ

と思う所以である。先輩方は皆それぞれが個性的ですごい登山をしていると思う。即ち私は先輩方が血の滲む努力をしてきたのだと解釈する。そうした先輩方を前にしたとき、自分の高校時代の知識や経験は実に脆弱で大学では一切通用しないものだと感じている。しかし、前述の私の登山哲学だけは普遍のものであると信じたい。それを胸に、今後信州大学山岳会で活動していく所存である。

四年間（で卒業できれば）宜しくお願いします。

魂の叫び（不快に思う方もいると思いますが御容赦下さい）

俺は努力なき自分は嫌いだ
流される自分が嫌いだ
怠惰な自分が嫌いだ
中途半端な自分が嫌いだ
冷めた御利口な自分が嫌いだ
言い訳をする自分が嫌いだ
人に寄りかかる自分が嫌いだ
自分から動けない自分が嫌いだ
口だけの自分は嫌いだ
そして、山に登らない自分が嫌いだ

俺は努力なき奴は嫌いだ
流される奴が嫌いだ
怠惰な奴は嫌いだ
中途半端な奴が嫌いだ
冷めた御利口な奴は嫌いだ
言い訳をする奴は嫌いだ
人に寄りかかる奴は嫌いだ
自分から動けない奴は嫌いだ
口だけの奴は嫌いだ
俺は熱い大馬鹿者が好きだ
真摯な奴が好きだ
真の漢（おとこ）が好きだ
自分を持つてる奴が好きだ
自分の道を邁進する奴が好きだ
山を愛し山を楽しむ奴が好きだ
そして俺は、山が大好きだ

新人合宿 1年 畠中 洸

今回の新人合宿は、僕にとって初めての本格的な山行だった。3000メートル以上の山に登るのも初めてだし、まして1週間も山で生活したことなどなかった。それだけに感動も多い合宿だった。東京出身の僕は、普通に生活している限り山というものは1つも見えないという暮らしを高校までしていた。だから信州大学に入学して松本で生活しているだけで、まわりの風景に感動していた。そんな僕にとって7日目の槍ヶ岳 山頂からの展望は他の人にとってのそれよりも刺激的であった気がする。本当は地形図と景色を見比べて山の知識を増やすべき場面であったと思うが、そうする気にはならずみとれてしまった。とても感動した。合宿は楽しかったが、体力的にきついことや、先輩に注意されることもよくあった。今後は体力作りをし、山での生活をもアツクさせたたいと思う。しかし今回の合宿で、なんといっても一番感じたのは、山が好きな仲間と山に行くことの喜びだ。最後に僕の魂の叫び。「人間は大自然のほんの一部にすぎないんだ。そのことを肌で感じるために俺は山に挑む。」

反省-感想

三森 武志

今日の合宿は2年生になったから初めての合宿だ。たけい、何といても楽しかった。2度目という
こともあり、余裕があまりなくて悪う。しかし先頭
を行くと、FIXを張ると、これまで以上に自分
の能力と危険認識を問われた。また上級
生がいない今、2年生といえども、その責任は大きい。
それなのにまで注意深くお水でいたか、と思うと、
そうではないときもかなりあった。これからの夏・冬合宿
を考えると、今のままでは到底自分の役割を
果たせそうにない。もう一度自分に何が足りない
のか見つめ直し、今後の合宿に向けて精神して
いこうと思う。

新人合宿もこれで3回目ということで、だいぶ余裕を持って合宿に臨めたと思う。しかし、改善すべき点もまだまだあるなども感じた。その際たるものが、隊全体のことを考えて行動するという点である。この課題は、これまで2年間山岳会でやってきて、常に自分につきまとしてきたものである。今回の合宿では、自分自身体力もそこそこついてきたことで幾分余裕をもって、隊のことを見るができたと思う。しかし、自分が見てきた上級生の姿には、まだまだ達していないというのが現状である。今年度になって週末ごと欠かさず山に行っているが、そのことによってだいぶ視野が広まってきたと思う。これからも山に行きまくって、強い上級生を目指していきたいと思う。小西正継ではないが、山は理論ではなく実践である。

新人たちへ。新人合宿はよい意味でも悪い意味でも山岳会の縮図だと思う。これを乗り切ったおまえ達は、もう立派な山岳会の一員であり、かけがえのない仲間である。能力に個人差はあるが、劣っているからといってくよくよする必要はまったくない。なぜなら、山にはさまざまなスタイルがあり、難しいところを登れるからといってそれが必ずしも正しいと言えないからである。自分が登っていて、叫びたくなるくらい楽しいと思える登山をするのが一番大切である。それに個人差があるのはあたりまえである。自分が本当に楽しいと思える登山をやるには、やはり努力も必要だしくじけそうになることもあるとおもう。しかし、山は楽しい。これだけははっきりといえる。山岳会の底辺を2年間さまよった俺でも、楽しい登山を見つけたことができた。おまえ達も必ず見つけることができる。頑張れ！！！！！！

最後に山岳会について。山岳会でつちかえるもので一番大きなものは、やはり人間力だと思う。なゆ樹が言うように、登山の力をまずつけなくては、人間関係なんてかまっている余裕はないと思うかもしれない。しかし、登山の力をつけるにしても、山岳会のような信頼関係で結ばれた関係の中で、互いに技術を磨きあうことによって伸びていくということもいえると思う。最近大学山岳部で、個人主義をとなえる論調があるが、俺は反対である。そういう人たちとは、価値観が違う。どちらが正しいとは言えないけど、一方的に答えを出すのはちょっと違うと思う。俺自身、山岳会に入って本当によかったと思っている。なぜなら、一生つき合っていけそうな仲間と出会うことができたからである。それが、山岳会でつちかえるものは人間力と考える所以である。というわけで新人のみんなこれからこゆーい関係を築いていこう。

最後の最後に、これからの目標。今年でも、来年でもいいので冬季南ア全山をやりたい。三〇君、君はすでに拉致済み。以上。

新人合宿反省感想

片寄 哲生

新人合宿終了！

これでもう3度目か・・・早いもんだ、と思う一方やはり少現役化の状況が気になりつつの合宿だった。来年はこの面子で自分が仕切っていかなければならない。現リーダーの佐藤さんを除く現上級生3名プラス新人4分の1人？、2人？、3人？、4人????？
来年の今になってみなけりゃわからないことであるのは十分承知していながらやっぱり気になってしまうものである。

ところで、2回生だった頃の自分の新人の見え方と、今年の新人4人の見え方が違うことに気が付いた。いい変化なのか悪い変化なのかは自分のことながら分からずにいるものの、少しでもリーダーとしての資質が備わり始めてきてくれていれば、と願わずにはおられない。

昨年度はプレ冬まで常に5回生ほかOBの手を借りずには入山すらできなかったのが、今回は入山から現役のみということでも幸先よく感じた。やはり現役上級生のみでないと味わえない緊張感があると思う。去年はそれが冬合宿で初めて味わわされたため、かなり戸惑ったものだった。新人が4人だけということも相まって、雪訓初日は英太郎を除く上級生三人で臨むこともできた。当然と言われればそうかもしれないが、去年じゃ考えられないことだ。

あくまでも、たかが新人合宿されど新人合宿が終わったばかり。次は夏合宿なのだから新人合宿で手をこまねいている暇はない。夏から冬へと、合宿の中身は次第に危険度を増していく。同時に自分の上級生としての力量も高めていかなければならない。

今年中の課題はまだ多い。

新人合宿と終えて。

去年に引き続き、二期目のリーダーとみた。去年は何かと小凶みゆき1週間であつたが、今年是非常にリラックスしていた。リラックスしてサボリリーダーにたづねていたかき(!?)

天気に恵まれ、今年も晴れた槍に登頂することか"て"れた。槍に登るのは何回目だろうか。残雪の槍、風雨の槍、人ごみの槍、様々な槍を見てきたが、槍はイねえ。あんな気持ちいい山頂はみかたない。今年の冬合宿は槍を目指そうか。

一年生、あつかれさま。いいハートナーになるう。ヨロシク。

以上

佐

係
の
感想
反省

準備

三森

- 紛失なし
- 準備日に用意するのは間に合わないものがあるので、1週間前くらいから準備すべきだった。(銀板・ボール等)
- デカ缶は1つで8~9人分ほど作れる。
- ナベのおこげはたわしより金たわしの方がよい
- 使える無線の確認と修理

準備が後手後手になってしまった、もっと早い時期から準備すべきだった。

エッセンの反省

高谷 英太郎

- ・ お茶と紅茶の、区別ははっきりと。みんなにわかるように袋に記入。
- ・ ルーは多めにするとグット。一日三箱。
- ・ 米の量をもっと増やしたらどうだろうか？
- ・ 天ぷらを揚げるのに、もっと小さいコッヘルをもっていくとよい。
- ・ 天ぷらを揚げるとき、ざるお玉は便利。
- ・ 天ぷらに、肉類を入れるのは正解。

会計

三森

収入

合宿費 13000 x 8

追加徴収 1462

その他 4000

計 114896

支出

食費 70452

交通費 32600 — タクシ - 27000 シンボさん 3600
1,7さん 2000

薬代 6354

その他 5484

計 114890

- ・追加徴収は面倒なので、はじめから多めに徴収する方がいいかも。
- ・薬代が余計、事前に用意すべきだった
- ・昨年到り1000円以上安くおさまった。

・ 気象

一．持っていった大型ラジオが役に立たなかったこと。

横尾のペースは電波の入りが悪いので大型のものをもっていったのだが、それで受信できなかったため、結局小型のラジオで天気図を取った(693Mz がよい)。

一年生はしっかり天気図がかけるようにしておくこと。

・ 医療

一．雪訓に対する認識が甘かった。雪訓は危険要素を十分に持っていることを再確認して今後臨むように。

二．冬の縦走では主に内服薬系が重要になってくるように思われるが、新人合宿、夏合宿ではむしろ外傷用の医薬品を取り揃えた方が適切である。今回はピッケルストップ中の一年をとめようとした高谷がピッケルであわや大出血となる怪我を負った。このとき医療缶を携帯していなかったことも大きな反省のひとつ。

三．医療缶はあくまでも簡単な医薬品しか揃えていなかった。さらに大きな怪我への対処法などについては赤十字などの講習会に参加して、正しい知識・技術を習得することが望ましいと思う。

今回の合宿で自分の体の癖(靴擦れしやすい個所がわかった等)がある程度つかめたことと思う。それを踏まえて今後の山行に活かして欲しい。夏合宿はさらにハードになるので、各自の調整はとても大事だ。

編集後記

11月一、暑くありませんね。虫たちも
おんが、おんがとおいております。とうとう、
今年、我が鳥羽荘に新居人が入りました。
名前は、ナメ・クシ"男君"です。最近、フロ
ト入子とおか毛の顔でフロに居座りつれて
てはや1ヶ月くらゐ。最近入子で、おフロか
ら出ると「おやみ」おんご言葉とさし
たりします。お、お親友にいらした、
おんがもせ"お友達にいらしたね。

編集代理 (何)

編集

フェニックス 高谷
(不夜鳥)

表紙

バクワイ なか樹

印刷日 6/6
印刷 松本

